

属性形容詞の連用修飾機能

孫 琦

1 はじめに

動詞を連用修飾する副詞的修飾成分には、主として副詞と形容詞・形容動詞の連用形がある。今回は形容詞の連用形による連用修飾を研究の対象とする。形容詞が動詞を連用修飾する際に、様々な連用修飾用法が見られることが先行研究によって明らかにされている。仁田1983(1)では、形容詞の連用形も含めて動詞に係る副詞的修飾成分を「結果の副詞」「様態の副詞」「評価づけの副詞」「程度の副詞」「数量の副詞」に分類している。それぞれの形容詞の連用修飾の用例は以下のようなものである。(いずれも仁田1983で挙げられた用例)

- ・女は爪を赤く塗っていた。(結果の副詞)
- ・刑事は軽く彼の両肩に手をかけ、(様態の副詞)
- ・親兄弟にも朋輩にもうまく隠してあるときには、(評価付けの副詞)
- ・彼はおそろしく興奮していたが、(程度の副詞)

このほかにも、新川1979では副詞と動詞の組み合わせに「状況的な結びつき」があると指摘している。例えば、以下のような用例が挙げられている。

- ・とおく光るかすみ¹が彼の目にうつる。(「空間的な結びつき」ありかや動作や現象がなりたつ場所を表わす。)
- ・彼ははやく結婚した。(「時間的な結びつき」動きや状態のなりたつ時点、はじまりやおわりの時点を表わす。)

このように、形容詞が動詞を連用修飾するときには様々な修飾の機能が存在する。さらに、形容詞の連用形は副詞と違って、同じ形容詞でも被修飾語の動詞によっていくつかの修飾のパターンが見られる。これは特に日本語の基本形容詞には普通に見られることである。

副詞の場合は、例えば「ゆっくり」は動詞を修飾する時「ゆっくり走る、

ゆっくり食べる」のように動作のスピードという側面について修飾し様態修飾の副詞となる。そのほかの修飾機能はあまり考えられない。しかし、同じ基本形容詞の連用形でも異なる動詞を修飾する場合には次のように異なる修飾法が見られる。例えば「玉ねぎを細かく切る」の「細かく」は切った結果における玉ねぎの状態を表わしていて、「枝が細かく揺れ動く」の「細かく」は枝の揺れ具合の程度を表わしている。それぞれの「細かく」の修飾機能が違っていることがわかる。しかしながら、実際の用例の中で形容詞がどのような修飾の機能で用いられているかを判断するのは難しい。

問題と思われるのは、例えば同じ形容詞の結果修飾でも「兵士を多く失った」といっても「兵士を少なく失った」とはふつういえないことである。動詞の様態修飾でも「細かく揺れ動く」といっても「あらく揺れ動く」とはいえない。このように、形容詞によって同じようなレベルの形容詞と思われるものでも、動詞への係り方がまったく異なる、ということが珍しくない。今までの研究では、どちらかと言えば形容詞の連用修飾機能全体について分類することに重点を置かれていたものの、それぞれの場合の形容詞の、動詞への係り方の詳細については、具体的な考察があまり行われていないように思われる。

本稿は先行研究の成果を引き継いだ上で、まず形容詞に見られるいくつかの連用修飾機能のある客観的な基準で見分け、それからそれぞれの場合の修飾語となる形容詞の特徴を明らかにすることを目的とする。考察の対象を、基本形容詞²¹のうち、以下の52語の属性形容詞²²に限定した。

青い、赤い、浅い、新しい、厚い、あらい、忙しい、薄い、多い、大きい、おそい、重い、かたい、軽い、汚い、黒い、詳しい、濃い、細かい、白い、少ない、鋭い、狭い、高い、正しい、小さい、近い、強い、遠い、長い、鈍い、はげしい、はやい、低い、等しい、広い、深い、太い、古い、細い、まずしい、まるい、短い、難しい、易しい、安い、やわらかい、若い、わるい、ゆるい、よい、弱い、

属性形容詞を考察の対象にしたのは、属性形容詞は感情形容詞よりその連用修飾法がある程度単純であるためである。感情形容詞も合わせて考察の対象

に入れると、形容詞の表わす評価性、つまり人間の心情や態度についての主観的な認識・判断などが関わって修飾のパターンも多く複雑になるため、分析の対象外にし、今後の課題とする。対象とされる形容詞の連用修飾について考察に用いた用例はすべてCD-ROM版『新潮文庫の100冊』及び国語辞典から採取したものである。

2 形容詞が動詞を結果修飾する場合

2.1 属性形容詞の連用修飾法

属性形容詞が動詞を連用修飾する時、主に「結果修飾」「様態修飾」「状況修飾」三つの修飾法が見られる^{※3}。それぞれを次のように定義する。

I 形容詞が動作の行われた結果における、対象あるいは主体の状態を表わす場合を「結果修飾」と呼ぶ。例えば、「玉ねぎを細かく切る」

II 形容詞が動作そのものの様子・程度を表わす場合を「様態修飾」とよぶ。
例えば、「雨が激しく降る」

III 形容詞が動作の行われる諸状況(時間・位置など)を表わす場合を「状況修飾」と呼ぶ。例えば、「星が高く光っている」

形容詞が連用形をとって動詞を修飾する際に、上のどの修飾機能で用いられているかを形の上では区別することは不可能である。連用修飾句の中の形容詞が一体どこにかかって、どんな意味で用いられているかをよく見て区別する方法しかない。しかしながら、文脈その他によって動かされやすい「意味」の問題を扱うには、できるだけ客観的な基準を設けることが必要となってくる。そうしたことについて、まず上記Iの形容詞の結果修飾について考えていく。

2.2 形容詞の結果修飾の判断方法

形容詞が連用修飾句の中で、動詞の表わす行為の結果における対象あるいは主体の状態を修飾する場合については、大きく二つの場合が考えられる。例えば「壁を赤く塗る」と「字を小さく書く」の場合を考えよう。まず、「壁

を赤く塗る」については、「壁を塗った結果、その壁は赤くなった」と言い換えることができる。「塗る」行為によって「壁」に変化をもたらし、その結果「壁」が「赤くない」状態から「赤い」状態に変わったと解釈できる。一方の「字を小さく書く」の場合は、「字を書いた結果、その字が小さくなった」という言い換えはできない。つまり、この場合の「小さく」は状態の変化の結果ではなく、「書く」という行為によって現われた結果として字の状態が「小さい」のである。そういう違いはあるが、「赤い」「小さい」のどちらも、対象あるいは主体の状態を表わしていることでは共通している。本稿はこのように、「変化の結果」と「状態招来の結果」の二つの場合における形容詞の修飾機能を、形容詞の結果修飾と考える。

また、「状態」と「状況」を区別して考える必要がある場合もある。例えば、先の例の「壁を赤く塗る」は「壁を塗った結果、その壁の色が赤くなった」を意味するが、「両足を広く開く」の場合は「両足を開いた結果、その両足の間の距離が広がった」ということを意味する。この場合の「両足」そのものの状態には何の変化もないが、変化したのが「両足」の位置という状況であるため、結果における対象あるいは主体の状況と状態を区別する必要があると考える。

そこでこれらを踏まえて形容詞の結果修飾を以下のように規定する。「対象(主体)に状態変化・状態招来をもたらす行為が行われた結果において、形容詞が対象(主体)の状態・状況を表わす場合を結果修飾とする。」

先にも述べたが、実際の用例では、形容詞が動詞を結果修飾しているかどうかは意味上の問題であり、形の上から判断することは不可能である。多くの形容詞の連用修飾句のうち、形容詞が動詞を結果修飾しているかどうかを判断するにあたって、以下のテストが有効であると考えられる。

(i) Nを(が)+Aく+Vする／Aく+VするN

→(i') Nを(が)+Vして、そのN(のX)が+Aくなった

→(i'') Nを(が)+Vして、そのN(のX)が+Aい

N：行為の対象(主体)を表わす名詞　A：形容詞　V：動詞(自・他)

X：Nの状態あるいは状況の側面を表わす名詞

ただし、Xとなる名詞の種類によって、形容詞は結果の状態修飾をしているか、結果の状況修飾をしているかを区別する。このことは以下のように示すことができる。

X 1 = 形、色、大きさ、量、長さ…… → 結果の状態修飾

X 2 = 距離、範囲、位置、時間……³⁴ → 結果の状況修飾

即ち、形容詞の連用修飾句が(i')(i'')のどちらかに言い換えても文の意味が変わらない場合は、その形容詞が動詞を結果修飾しているといえる。(i')は変化の結果における対象(主体)の状態・状況を表わし、「壁を赤く塗る」の場合であり、(i'')は状態招来の結果修飾で、「字を小さく書く」の場合である。

さらに二つの結果修飾を区別するには、ソントーン1983で考案されている形容詞の連体形によるテストがある。つまり、(i'')の状況招来の結果修飾のみ以下のテストが適応するのである。

(i) Nを(が)+Aく+Vする/Aく+VするN

→Aい+Nを(が)+Vする

例えば、「字を小さく書く」は「小さい字を書く」に言い換えても意味がさほど変わらないが、「壁を赤く塗る」は「赤い壁を塗る」に言い換えたら意味が変わってしまう。

その他の用例としては、以下のものがある。例[2][3]はそれぞれ「髪を刈り上げてその髪の長さは短くなった」、「彼の手を持ち上げてその手の位置が高くなった」と言い換えることができ、例[6][7]はそれぞれ「守備を配置してその守備の数は多い」「多くの守備を配置する」、「側室の代価が支払われてその代価は高い」「高い側室の代価を支払われる」と言い換えることができる。言い換えのテストによって、例[1]～[8]では形容詞は動詞を結果修飾していることがわかる。そのうち、例[1]～[4]は結果修飾の(i')の場合、[5]～[8]は結果修飾の(i'')の場合である。(作品名は略記で示し、詳しくは引用用例出典を参照)

- [1] 蒸した鶏を薄くスライスしたもの。(太郎)
- [2] 髪を短く刈り上げた、小柄で色の浅黒い男だった。(一瞬)
- [3] 柳に歩み寄り、彼の手を高く持ち上げた。(一瞬)
- [4] 各空母は、今は七軒の間隔に広く散開し、(榆家)
- [5] 医者が短く挨拶をして室外へ去った。(榆家)
- [6] 守備を多く配置してそこに出入りする者は、(戦艦)
- [7] 側室の代価としてこんなに高く支払われるようなことは、(国盗)
- [8] あの子たちの送った手紙が長く載っていてね、皆の名前まであるわ。(死者)

形容詞が連用修飾句の中で結果の副詞として用いられているかどうかを判断するには、以上のような言い換えのテストが有効であると考えられてきたが、もう一つ判断する際の手がかりとなるのは被修飾語の動詞である。結果の副詞を取る動詞は、対象に状態変化が起こる他動詞と主体変化を意味する自動詞であると仁田氏は分析している(仁田1983(2))。「状態招来の結果」も「結果修飾」と考える本稿では、被修飾語となりうる動詞は仁田氏のいう変化動詞以外にもあることになる。ある行為によって対象に働きかけ、ある状態をもたらすといった意味合いを持つ、奥津1997でいう生産動詞と発生动詞、例えば「書く、作る、配置する、失う、生える、映る、現われる、残る」などの動詞が被修飾語になると、形容詞が結果修飾となる可能性があると言える。言い換えのテスト、それから被修飾語の動詞の意味的特徴という二つのことを考慮に入れ、多くの形容詞連用修飾の用例の中から、形容詞の結果修飾のものを選び出すことが可能となる。

2.3 結果修飾の場合の修飾語となる形容詞の特徴

動詞を連用修飾し、結果の副詞として用いられる形容詞は、主体あるいは対象の状態を表わし、属性形容詞の本来の意味で用いられるため、すべての属性形容詞が動詞を結果修飾でき、特に制限はないと思われやすい。しかし、実際の用例を調べた結果、結果の副詞となりにくい属性形容詞も見られた。

そこで、結果修飾であり用いられない理由を考えて次の①～⑤に分類した。

①「忙しい」「激しい」「はやい」「おそい」

これらの属性形容詞には結果修飾の機能はない。これらの形容詞は連体用法あるいは終止用法の場合にも、修飾しているのは、ものの静的な属性ではなく、動きの激しさやスピードなどの動的な様子であるため、連用修飾で用いられる時も動作の結果における対象あるいは主体の状態を表わすことができないのである。

②「強い」「弱い」「重い」「軽い」「若い」「貧しい」

まったく結果修飾の用例が見られないわけではないが、かなり限られた動詞の場合にしか結果修飾とならない。例えば「強く鍛える」「行李を軽く入れる」など。これらの形容詞は「大きい」「丸い」「細い」「厚い」のように、ものの形や色などのはっきりと外に現われる属性ではなく、強さや重さや若さなどのようなどちらかといえども(人間)の外から見てもその変化などがわからないような属性を表わすため、これらの形容詞が行為の結果あるいは変化の結果における対象あるいは主体の状態を表わすことは、ある限られた動詞に対してしかできないのである。

③「鈍い」「少ない」「汚い」「わるい」

これらの形容詞はそれぞれの対義語である形容詞に比べて連用用法の用例が極端に少ない。これは形容詞の表わす評価性と関わっているように思われる。用例の中には、「少なく数えても～」「～ほど弱く出来上がってはいなかった」のような結果修飾の用例が見られたが、「鋭い」「多い」「よい」と対照的に、マイナス的な評価を表わすこれらの形容詞は、行為あるいは変化の結果を表わす場合もあまり好ましくない結果を表わすため、連用修飾ではあまり用いられないのであると推論される。

④「難しい」「易しい」「詳しい」「正しい」「等しい」

これらを一応属性形容詞と考え考察の対象に入れたが、やはり表わす意味がほかの属性形容詞とは少し違って、人間の主観的な判断の要素が濃く現われる形容詞である。このため、被修飾語の動詞のほとんどが抽象的な事柄を表わすものである。例えば「難しく考える」「詳しく説明する」「正

しく判断する」など。動詞が抽象的な動詞であるゆえに、その結果もものの形などのような目に見える事柄ではないため、修飾語の形容詞がはっきりとその行為の結果を表わしているとは言い難くなる。もちろん考え方によっては結果修飾と考えられなくはないが、形容詞が抽象的な動詞を連用修飾する時、それが動詞を結果修飾しているかどうかは曖昧となってくる場合がある。

⑤「近い」

「遠く」は「遠く離れる、遠く隔てる、遠く投げる」のように行為の結果における対象の状況を表わすことができるが、「近く」にはこのような結果修飾の用例はあまり見当たらない。「近く」は「少し近くへ寄って」「床几に近く裾を投げて」「近く行なわれる予定」のように、「近いところ」「もうじき」という意味での場所の名詞あるいは時間の副詞として用いられる場合が多い。

以上、属性形容詞の結果修飾の機能について見てみた。同じ属性形容詞でも、一様には動詞を結果修飾することができないことがわかった。これはそれぞれの形容詞のもつ語彙的意味・評価的意味に起因するものではないかと考えられる。

3 形容詞が動詞を結果修飾する以外の用法について

次に、先にあげた分類のうちⅡ・Ⅲについて考えてみることにする。形容詞は対象あるいは主体の状態を表わすのではなく、直接動詞の表わす動作について修飾することがある（Ⅱ様態修飾）。それから、形容詞は動詞の表わす動作そのものの様子を表わすのではなく、その動作の行われる外の諸状況を表わす場合もある（Ⅲ状況修飾）。この二つの異なる修飾法を区別するには以下のテストが考えられる。

(ii) Nを(が)+Aく+V／Aく+V+N

→(ii') Nを(が)+VするXが+A

I 結果修飾の時と同様にXとなる名詞の種類によつての区別がある。

X 1 = 程度(力の・強さの・速さの・ゆれ幅の・激しさの……)→様態修飾
(程度修飾)

X 2 = 位置・範囲・時間・時期… →状況修飾

* 「様態修飾」のうちにいわゆる「程度修飾」が含まれる。両者を区別することが難しいと考え、今回は一緒に扱うことにした。被修飾語の動詞が抽象動詞の場合は、形容詞が単に程度を表わし、修飾の機能が程度修飾となりやすい。

例えば、例[9]の形容詞連用修飾の部分(ii)でテストで言い換えると、「彼女は鼻の両側を叩く力の程度が軽い」であり、例[11]は「汽車が揺れるゆれ幅の程度が大きい」と言い換えることができる。これに対し、例[13]は「資料を調べる程度が広い」とはいえず、「資料を調べる範囲が広い」と言い換えることができる。このような方法で、例[9]～[16]のうち、[9]～[12]の場合の形容詞は動詞を様態修飾していて、[13]～[16]は動詞を状況修飾していることがわかる。

[9] 彼女は鼻の両側を平手でハタハタと軽く叩いて、(痴人)

[10] パパの耳たぶを鋭く咬んでやりました。(聖少)

[11] 駅に停まるごとに汽車が大きくがたと揺れて、(黒い)

[12] 送ろうとしたが、附添不要だと強く拒むので諦める。(黒い)

[13] 多くの人の意見を集め、広く資料を調べ、(人民)

[14] 澄んだ秋空を高く雁が渡って行ったかと思うと、(李陵)

[15] 新しい試合の日時を早く決めてくれなかったら、(一瞬)

[16] 長く彼を苦しめたであろう血の問題が、(一瞬)

次に、様態修飾と状況修飾のそれぞれの場合について詳しく考察する。

3.1 様態修飾の場合の修飾語の形容詞の特徴

3.1.1 様態修飾が可能な形容詞とそうでない形容詞

今回の考察の対象となる属性形容詞には、形容詞の語彙的意味によって、

具体的な動きを表わす動詞に対し、様態修飾のできるものとできないものがある。例えば、「細かい」は「細かく揺れる」のように動きのゆれ幅という側面の様子について修飾できる。それに対し、「多く」「新しく」「濃く」「狭く」のような形容詞には直接具体的な動きのある側面についてその様子を表わすことができない。例えば、「多く動く」とか「濃く揺れる」などのような言い方はない。辞書の用例を見てみると、動詞を様態修飾できる属性形容詞はむしろ少ないことがわかった。

ところで、今回の考察にあたって、基本形容詞辞書「IPAL」を用いることにした。「IPAL」を用いた理由は、一般の国語辞典より、分類の意味項目が細かく、連用修飾用法で用いられる場合の形容詞の意味なども、きちんと記述されているからである。今回の研究は形容詞が動詞を連用修飾する場合の意味・機能に注目するため、終止・連体用法で用いられる形容詞の意味・用例を対象外にし、辞書に記述されている連用用法での意味・用例のみを参考の対象にした。例えば、「長い」という形容詞について、「IPAL」では全部で三つの異なる意味項目を立てているが、そのうちの二つの意味項目において「長い」の連用用法が見られた。以下のようなものである（用例もそのまま「IPAL」にあるものである）。

【長い】

- 1 両端間の距離が大きい。

例：伸ばす、伸びる

- 2 時間が多い。

例：滞在する、待つ、待たされる、かかる

「長い」の、動詞を連用修飾するこの1、2の用法には様態修飾がないことがわかる。1の「長く伸ばす」の「長く」は結果修飾機能で、2の「長く滞在する」の「長く」は状況修飾機能である。一方、「IPAL」にある「細かい」の、動詞を連用修飾する用法の見られる意味項目を調べた結果、五つの項目のうち、「連続した動きや変化などのひとつひとつが小さい。例：震える、揺れる、

揺する」という意味での「細かく」は動きの様態の中のゆれ幅という側面について修飾していて、動詞の表わす動作について修飾していることになる。

このように対象となる形容詞一つ一つについて検討した結果、次のように対象となる属性形容詞を二分することができた。

<1>具体的な動作性動詞の表わす動きの側面について様態修飾できる形容詞。

忙しい、大きい、かたい、軽い、細かい、鋭い、高い、小さい、強い、はげしい、はやい、低い、深い、ゆるい、

<2>具体的な動作性動詞の表わす動きの側面について様態修飾できない形容詞。

青い、赤い、浅い、新しい、厚い、あらい、薄い、多い、おそい、重い、汚い、黒い、詳しい、濃い、白い、少ない、狭い、正しい、近い、遠い、長い、鈍い、等しい、広い、太い、古い、細い、まずしい、まるい、短い、難しい、易しい、安い、やわらかい、若い、わるい、よい、弱い、

ものの属性を表わす形容詞本来の意味から、意味が抽象化され、程度性を表わすことができるようになり、動詞の表わす具体的な動きそのものの様態を表わすことになるという、属性形容詞の意味的転移が見られる形容詞と、そうした働きが見られない形容詞がある。このような属性形容詞の意味的転移の相違は、さらに形容詞の連用修飾の用例にも反映されている。<2>に挙げられた形容詞には動詞を修飾する用例のうち、具体的な動きの側面の様子を表わす様態修飾の用例は見られなかった(すべてが様態修飾以外の結果修飾や状況修飾などの用例である^{※5)})。逆にいえば、具体的な動きが実現されるのに関わる内属の側面には、長さや広さや色や形状などが含まれていないと考えられるのである。

3.1.2 様態修飾における形容詞対義語の非対応

対義語である二つの属性形容詞が、結果修飾の機能において必ずしも同じように用いられないことを2.3で述べたが、形容詞の様態修飾の機能におい

ては、より一層その対義語の非対応が目立つのである。例えば、「強く手を握る」が言えても「弱く手を握る」とは言えない。「深く頭を垂れる」が言えても「浅く頭を垂れる」とは言えない。二つの場合とも逆の状況を「軽く」で修飾できる。また、「大きいー小さい」という対義語ペアに関して、連用用法では「大きく影響した」が成り立つのに対し、「小さく影響した」とは言えないが、連体用法においても「大きな影響を与えた」が用いられるのに対して、「小さな影響」とは普通言わない。「あまり影響しなかった」とか「微妙に影響した」などの打ち消しと呼応する副詞や形容動詞を用いて言い表す場合が多い。全体的には、「大きい」「強い」「深い」「かたい」「はやい」「鋭い」のような程度の大きいほうを表わす形容詞が動詞を様態修飾することができ、「小さい」「弱い」「浅い」「鈍い」などのような程度の小さいほうを表わす形容詞が動詞を様態修飾する用例はあまり見られない。ここでは特に、被修飾語が抽象的な行為などを表わす動詞の場合において、程度の大きいほうを表す形容詞しか連用修飾できないことについて考えたい。

被修飾語の動詞が抽象動詞の場合は、形容詞の意味も抽象化され、単に行為などの程度を表わし、修飾の機能が程度修飾となりやすいことは前述でも触れたが、具体的に、以下のような抽象動詞が被修飾語になると、形容詞がそれを程度修飾するのである。

- ・ 抽象的な作用や人間の行為を表わす動詞。

影響する、作用する、貢献する、後退する、関連する、利用する、食い違う、究める、考える、察する、踏み込む、認識する、期待する、お付き合いする、説明する、注意する、反対する、感謝する

- ・ 人間の感情・生理現象などを表わす動詞。

驚く、眠る、(指先が)しびれる、(体が)動く、(足首を)捻挫する、(頬を)染める、嫉妬する、恥入る、(官能が)刺激される、反応する、

修飾語である形容詞はこの場合、実質的な意味を帯びておらず、抽象化され、もっぱら程度性を表わす意味で用いられる。例えば、抽象的な行為や変化の程度を表す「大きく影響する、大きく作用する、大きく食い違う」、客観的物事の関係や作用の強さの程度を表す「強く結びついている、強く印象

に残る、強く影響を受ける」。この場合は、形容詞が修飾する動詞は抽象的な現象や作用を表す動詞である。なお、なぜ対義語である「小さく」「少なく」「弱く」などが使われないかについては、機会を改めて論じたい。

3.2 状況修飾の場合の修飾語の形容詞の特徴

3.で考案された(ii)のテスト「Nを(が)+VするXが+A」で、Xにあたることばは「位置・範囲・時間・時期」などの場合、形容詞が動詞の表わす動き・行為の空間的・時間的諸状況を表わし、状況修飾となる。例えば、「星が高く光っている」は「星が光る位置が高い」、「はやく目を覚ます」は「目を覚ます時期がはやい」、「広く枝を張っている」は「枝を張る範囲が広い」。客観的な状況を表わすことのできる形容詞はその語彙的意味によって制限されるため、考察対象となる属性形容詞のうち、以下のようなものだけが動詞を状況修飾できる。

「空間」広いー狭い 遠いー近い 高いー低い

「時期」早いー遅い 若い

「時間」長いー短い

「新旧」新しいー古い

これらの形容詞の状況修飾の実際の用法においては、例えば「早いー遅い」「高いー低い」のように、行為の行われる状況を客観的に表わすことはできるが、やはり形容詞によって個別的な語彙的制限が見られ、対義語が非対応となる場合がある。例えば、「新しく基地を建設する、新しくおしろいを塗る」の場合の「新しく」は「作る、塗る、描く、買う」のような人間の行為を表わす動詞を修飾することができるが、これらの行為の出現は自然と新しい状況となり、「古く」の表わす語彙的意味と矛盾するため、「古く」にはこのような状況修飾ができないのである。また、「長く寝ている、長く勤める、長くとどめる」に対して「短く寝ている、短く勤める、短くとどめる」とはふつつ言わない。「寝る、勤める、とどまる」などの動詞の語彙的意味にはふつつある程度時間的な長さを要求するので、短い時間内ではあまり成

立できない行為であるためではないかと考えられる。

以上、属性形容詞の様態修飾・状況修飾について見てきたが、やはり結果修飾と同じように、その修飾の機能のあるものとなないものがある。その実態はある程度明らかになったが、なぜ形容詞にはこのような修飾機能においての違いがあるかは単に個別的な制限があるからと片づけるのではなく、その理由についてさらに追究すべきであると考え、今後の課題にしたい。

4 おわり

本稿は日本語の基本形容詞のうちの属性形容詞を対象に、その連用修飾の機能の面から考察をしてきた。一口に形容詞の連用修飾といっても、実は様々なものが存在し、まず、それらにある客観的な基準によって区別することが必要であると考え、(i)(ii)のような言い換えのテストを設けることにした。これによって、属性形容詞の大きく異なる三つの連用修飾のパターンが明らかになった。連用修飾法をはっきりと区別した上で、それぞれの場合の修飾語となる形容詞の特徴について分析した。また、形容詞の連用修飾に共通して見られることとして、形容詞の対義語の連用用法における非対応が挙げられる。形容詞のそれぞれの修飾法での非対応の特徴などについても分析を試みた。

形容詞を機能という面から細かく考察することによって、形容詞の語彙的文法的意味に対する認識をより深めることができるように思われる。

注

- 1 基本形容詞とされたものは玉村文郎1987と「IPAL」に共通して載っている103語の形容詞である。
- 2 基本形容詞の中から今回の考察対象の52語を選出した基準は以下の通りである。なお、形容詞を属性形容詞か感覚形容詞か感情形容詞かと判断する際に主に細川1993と「IPAL」の「意味分類」の項目を参考にした。
 - ① 感覚形容詞及び感情形容詞を考察の対象から除いた。

② 一般的に属性形容詞とされるものの中からも一部を除いた。その理由については、例えば「明るい」という属性形容詞は、「髪を明るく染める」のような物・事柄の状態を表わす属性形容詞的な用法以外にも、「彼らは明るくはしゃぎ出した」のように主体となる人間についてその様態・態度・心情などを表わすような感情形容詞的な用法もある。この場合の「明るい」は「楽しい」「うれしい」のような感情形容詞の表わす意味に近い。「明るい」「暗い」以外にも「親しい」「優しい」「厳しい」「おもしろい」「つまらない」がある。これらを今回考察の対象外にした。

③ 「いけない」「ない」「惜しい」「欲しい」のような連用形をとって動詞を連用修飾する用法がふつう見られない形容詞も除外した。

3 本稿では形容詞が「する」「なる」「見える」「思う」「感じる」などの動詞を連用修飾する場合を、考察の対象外とする。これらの場合は直接述語を修飾するものとは性格が異なるからである。それからいわゆる形容詞連用形の並列用法も対象外にした。例えば、「声が高く澄んでいる」「路が細く折り曲る」など。

4 紙幅の都合のためX1、X2の分類について詳述することはできないが、これについて別稿の用意がある。

5 用例中に、「柔らかい」には「柔らかに抱き寄せる」というのが見られたが、この場合の「柔らかに」は動作そのものの様子を表わしているより「やさしく」というような人間の主観を表わしていると考えられる。それから「鈍い」には「心臓が鈍く打つ」「鈍く震える」、「薄い」には「薄く笑う」のような文学的な表現が見られた。

引用用例出典

CD-ROM版『新潮文庫の100冊』新潮社版NECハイブリッド1995 新潮社
(太郎)『太郎物語』曾野綾子／(一瞬)『一瞬の夏』沢木耕太郎／(楡家)『楡家の人々』北杜夫／(戦艦)『戦艦武蔵』吉村昭／(国盗)『国盗り物語』司馬遼太郎／(死者)『死者の奢り』大江健三郎／(痴人)『痴人の愛』谷崎潤一郎／(聖少女)『聖少女』倉橋由美子／(黒い)『黒い雨』井伏鱒二／(李陵)『李陵』中島敦／(人民)『人民は弱し官吏は強し』星新一

参考文献

- 新川忠 1979 「『副詞と動詞とのくみあわせ』試論」『言語の研究』言語学学会
むぎ書房
- 仁田義雄 1983 (1) 「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』Vol. 2-10
(2) 「結果の副詞とその周辺」『副用語の研究』 明治書院
- ロザリンド・ソーントン 1983 「形容詞の連用形のいわゆる副詞的用法」『日本語
学』Vol. 2-10
- 玉村文郎 1987 「日本語基本教育2570語」『日本語の語彙・意味(2)』アルク
- IPAL 1990 『計算機用日本語基本形容詞辞書IPAL』情報処理振興事業協会技術セン
ター
- 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店
1996 『意味分析の方法』ひつじ書房
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 細川英雄 1993 「形容詞の主観性について－対象内容による形容詞の分類とその位
置づけ－」『早稲田日本語研究』創刊号
- 奥津敬一郎 1996 「連体即連用？」『日本語学』12月号 連載第13回 明治書院